

目次

1	2
2	6
3	10
4	14
5	18
6	27
7	32

あとがき.....34



遠い祖国で作られた時計は、やけに正確に時を刻む。

年、月、日、これでもかと思せつける、時間は止まることがない。

南米のジャングルは季節の変化に乏しく、腕時計の表示だけが、無慈悲な時の流れを伝えてきた。

「今日も、ひとり逃げたって」

ひそひそと話す声が入る。獠は、所々へこんだヘルメットを手をぶら下げて、足元の赤茶色の土を蹴るようにして歩いていた。

ゲリラのアジトと言えば聞こえはいいが、寄せ集めの兵が仮住まいをしている場所だ。清潔でもないし、食料も武器も医薬品も衣料品も足りない。物質的に乏しい中で、命のやりとりを続ける、終わりの見えない日々は、たやすく兵士をホームシックにした。

多くは若者、そして新参者。決まってこの季節には多くなる、戦争から逃げ出す者達。

獠の手にぶらぶらと揺れるヘルメット。傷だらけの表面、こめかみの位置に血が飛んでいた。流星のあたり。

獠はヘルメットをぶら下げて、目指す人物が座る場所へと進む。

海原は、藁と土で建てた家の陰に、壁に凭れて座り込んでいた。

「親父？」

海原は顔を上げた。

「時計、壊れたのか？」

「いや、壊れるものなら良いのだけれどね」

獠はまたぶらぶらとヘルメットを揺らした。唇を尖らせて、黙ったまま立ち尽くしている獠を、海原は促して、自分の傍らに座らせた。

おとなしく従うものの、やはり獠は黙ったままだ。

海原は、膝の上に載せていた時計を腕にはめ直した。それから、獠の頭に手を置いて、柔らかな黒髪をかき回した。

指先に砂の感触が当たる。日がな一日汗をかいているというのに、垢じみた兵士達の中で、獠は汚れていないように見えた。

「また……」

やっと口を開いた獠は、また黙ってしまふ。

獠の言いたいことはわかっているのだ。

「脱走兵は、裏切りものは殺す。わかっているだろう」

低く囁くと、獠の眦が朱を帯びる。怒りか、それとも悔しさか。

「お前と仲が良かったそうだな」

クリスマスシーズンに里心がついて逃げ出した脱走兵を、そのままにしてやるグリラもいる。海原が率いる部隊は許さない、それだけのことだ。

夜中、部隊が寝静まったのを見計らい、脱走を試みた若者は、海原が射殺した。

苦しませるつもりはなく、急所を狙った。彼は、すぐに息絶えた。何を残すこともなく、若者は死んだ。死体は見せしめの意味を込めて、ジャングルの木に吊した。吊された死体はぶらぶらと揺れた。

あっちへ行こうとして戻り、こちらへ来ようとして戻り、いつまでもぶらぶらと揺れていた。

「そんなに、帰りたいのかな」

獠がぼつりと呟く。

「家族ってそんなに大事なのかな。クリスマスって、そんなに大事なのかな」

グリラに限らず、この国のほとんどはカソリック信者

だ。クリスマスは12ヶ月近く祝われる。キリスト生誕の日を過ぎ、三賢者が祝いの品を持ってくる日まで、お祭り騒ぎは続く。

「さあ、どうだろうね……」

獠は手にしていたヘルメットを放り投げた。きれいな放物線を描いて飛んだヘルメットは、乾いた土の上をごろごろといびつに転がって、やがて止まる。

「親父も、日本に帰りたい？」

「いいや」

あっさりとした答えた海原に、獠はぼかんとして、それから破顔した。

澄んだ青空のような笑顔だ、と海原は思った。

この国では、クリスマスにはサンタではなく、神の子が
ブレゼントを持ってくるのだと聞く。

神の子。

時間は取り留めもなく流れていく。このまま永遠に続い
ていくように思う。争いの日々。

「あいつ、ばかだよな」

ぼつりと獠が言った。

「逃げ出して帰って、誰かを殺した手で家族と抱き合う
の」

責めるでもなく、幼子が純粹に尋ねるように、獠は不
思議そうだった。

ひとはより所なくしては生きられないのだと言う。海原
にとつての抛り所は、多分、世界が持つ残酷さだ。

獠の抛り所は、おそらく。

抛り所を無くして生きるなら、それは人を越え、神の子
でありながら、神を越えるのかもしれない。

獠より多くの血に塗れた手、その手首にはまる腕時計
を、海原はそつとなぞった。

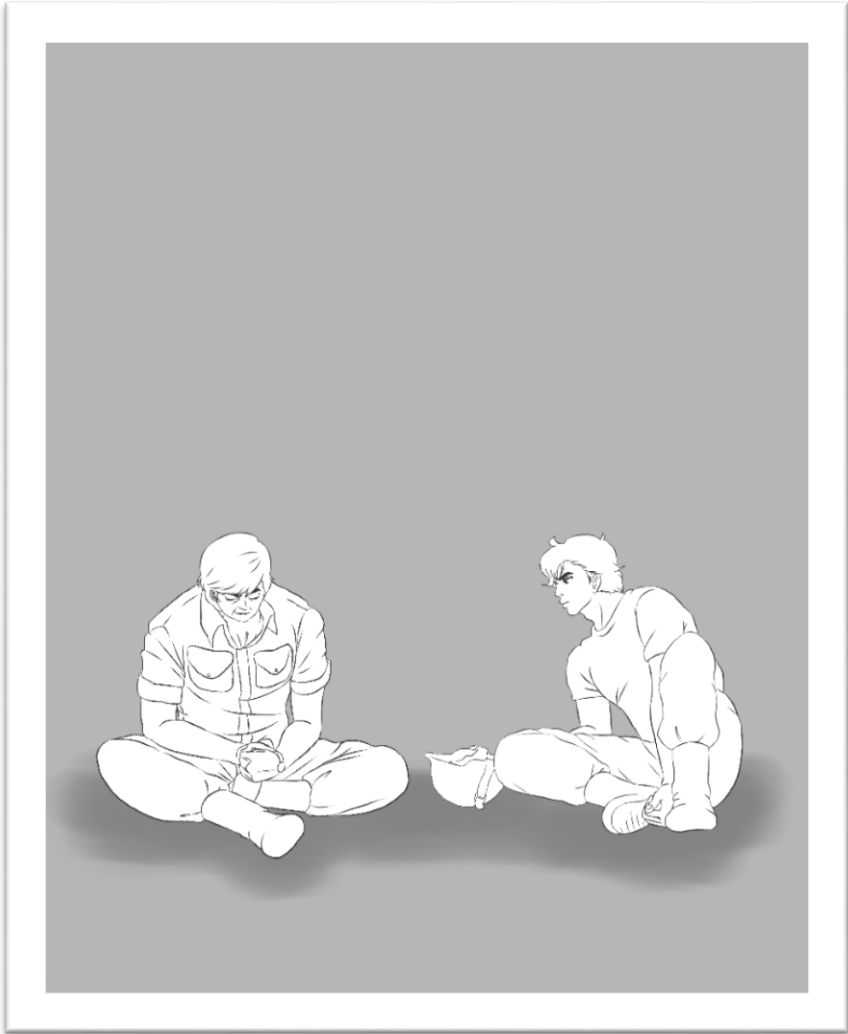
針は進む。淀むこともなく時は流れる。そしていつか、
チクタクチクタク、チクタクチクタク、終わりの鐘の音が
鳴るまで。

いつか、この時計を獠にくれてやろう。海原はそつと祈
る。神ではなく、誰にでも等しく平等である死に。

「メリークリスマス、獠。お前は、神が寄越した最高のプ
レゼントだ」

それを聞いて、獠は笑った。

やはり澄んだ空のような、清々しい笑顔だった。



黎明に星の知り得る
意味を説きつつ
ブラックホールが
天体とも告ぐ

これが何度目のクリスマスだろう。そして、あと何度あるのだろう。

天気予報は雪だったから寒いはずだ。寒さは孤独を連れてきて、香は不安げに空を見つめる。当たり前だが、夜空には、それも、赤い服の老人もいない。

クリスマスだというのに、香はビルとビルの谷間、風がびゅうびゅう吹き込む場所で、小さくなっていた。

吐く息が凍り、かじかんだ手足は痛いくらいだ。

「お、香、ご苦労ご苦労」

香は肩を揺らして振り返る。そこにはパートナーが立っていた。しゃがんでいるから、本当に見上げるほどに背が高い。町のネオンの遠い灯を背中に背負って、真っ黒い陰が香に覆い被さる。

手に渡された缶コーヒーが、熱すぎて握れない。香を獠は興味深そうに眺めて、缶コーヒーを引き取った。

香はよろめきながら立ち上がった。震えて歯の根が合わない。

「まだ出てこないわよ」

弱音のひとつふたつも言いたいところを、香はぐっとこらえた。

脆い矜持だ。現に、獠は寒さを感じさせない。白い息を吐くこともなく、雪に湿ったコートが重く足に纏わりついても、歩みを止めない。

鼻の頭をまっ赤にして、奥歯を噛みしめ、自分を見上げる香をどう思ったのか、獠は缶コーヒーをコートのポケットに突っ込むと、コートの前を広げた。

「おいで、香」

香の頬に朱が散った。「え？」と小さく漏らした香は、さらうように獠に抱き寄せられた。

獠のコートごと抱きしめられる。温もりは香の鼻腔も冒した。湿った温かさに煙草の匂いが混じる。

咄嗟に手を突っ張って体を引き離そうとするも、そもそも冷え切った体は温もりを求めていて、それは恋しいほど。

見上げると、香のつむじを見つめていたらしき獠と目があつた。

「あつたまることでもする？」

香はゆっくりと言葉の意味を斟酌する。

「おしくらま」

「違う」

獠は香の下腹に自分の股間を押しつけた。

「ひっ」

これは性的なほめかしだ。

柔らかい下腹に堅い切っ先がめり込む。十分な質量を持つた熱は、香の内部での動きを模しているかのように、よりびったり合わせられるよう、獠の手が後ろから香の尻を掴んだ。指は独立して動き、香の尻の肉をもみながら、そのあわいまで進入しようとしているのか。

「ほら、香ちゃんこんなに冷え切ってる。遠慮しないで」

「す、る……っ！」

かじられた耳たぶから、甘いおののきが生まれ、全身に広がっていく。

「さっき何考えてた？」

香は不意をつかれて、一瞬大きく目を開き、それからゆっくりと閉じた。この男はそういう人間だったと思い出した。気まぐれに、おどけたりふざけたり、——牙をむき出しにしたり。

今日はクリスマスだ。クリスマスや誕生日、楽しい夜、

香はいつも孤独になる。

周囲の人間達が過ぎすほど、豊かな時間が、香に訪れたことはない。

けれど、もし香にも等しく贈り物が届けられるなら、そういう聖夜なら、一日でも長く、獠のそばにいたい。

「お前の考えなんて、すぐわかるんだ。俺から離れることばっかり考えてる」

違う、と上げかけた声は口づけに殺された。

隙間なく合わせた唇から、熱い舌が滑り込み、ちぢ込めた香の舌をからめ取る。くまなくなぞり、こすり、粘膜か

ら溢れ出る唾液を舐り上げるのは痛いほど、舌は香の口内を蹂躪した。

キスが解ける。強い視線が向けられている。獠の背後、雪が降り出した。

「俺がお前を置いて行くんじゃない。お前が俺を置いて行くんだ」

獠は香の唇の上、触れんばかりの近さで言った。「お前を全部くれよ」

キスに腫れ上がった唇が、続きをねだっている。唇をなだめるように、重ねた唇が囁いた。

「まだ、言ってなかったな。香、メリークリスマス」

待ち望む

人らはどうに

到着し

どこのホームで

待てば良かった



数年前の冬のことを思い出す。

その頃、僕はまだ小学生、高学年に在籍していた。周りの子達よりも、少し大人びていたと思う。男子に混じって外遊びをするのも、女子の噂話に混じるのも、どちらも僕はやんわりと断って交わらず、それでも、成績や容姿などで、頭一つ抜き出ていることで、彼らから承認を得ていた。

今となれば、彼らの中に居場所がなかったわけではない。居場所があるのに、その居場所が自分に相応であったのに、僕はそれを受け入れることができなくて、もっとふさわしい、良い場所があるのではないかと拗ねていたのだ。

おそらく、それは僕が家族との間に持っていたわだかまりに由来したのだと思う。僕の両親とともに研究者で、家を空けることが多かった。だからといって、両親が僕を蔑

ろにしたというわけではない。単純に時間が足りなかったのだ。そして、素直にそばにいて欲しいと言えるほど、僕は幼くもなかった。もっと僕を見て欲しい、もっと僕を、僕だけが必要だと求めてくれる場所が欲しい、つまり僕は飢えていたのだ。

僕は、孤立を選択することで持て余した時間を、近所の公園で過ごすようになった。都市計画の余白に作られた公園は利用者がほとんどなく、いつも静かな場所だった。

僕はそこで、ひとりの女の子と出会った。同じくらいの年頃で、冬空に瞬くオリオン座のように美しい少女だった。僕はひとめで彼女に恋をした。初恋だった。

彼女は寡黙だった。僕も彼女の前では、いつもならべらべらと都合良く言葉をつき出す唇も震えて役に立たず、日頃バカにしている教室の男子とさして変わりなかった。

それでも、根気よくつきあってくれた彼女に、僕は自分が思うことを話すようになった。彼女と過ごす時間が増えるほど、僕は自分の中にあつた、子どもじみた思いがりや、寂しさ、不安といった感情と向き合うことになった。

たまに僕は感極まって泣いてしまうこともあった。そうすると、彼女は星のごとき瞳を、長い睫にけぶらせて、感情の嵐が過ぎ去るのを待ってくれるのだった。

夕暮れの影が長く伸び、やがて闇に溶けるまで、何度、彼女と過ごしたことだろう。

師走に入り、夕方の公園はぐんと冷え込むようになった。その年のクリスマス、滅多に予定のわからない両親が、イブに揃って家に帰ってくると約束してくれた、そのことを僕は勢い込んで彼女に話した。彼女はいつものように、白い指を膝の上に重ねて、興奮した僕の顔をじっと見つめていたと、記憶している。

忘れもしないあの夜、十二月二十四日僕の両親を乗せた車は事故に遭い、僕は両親を一度に失った。サンタからのプレゼントは二十五日に宅配便で届いた。箱は二つあった。一つは僕が欲しがっていたゲーム機。それともう一つ、父母から僕への箱には、クリスタルのオーナメントとツリーが入っていた。『遅くなってごめんね。一緒に飾ろうね。パパとママより』カードにはそう記されていた。

悲しみに浸る間もなく、葬儀や様々な手続きに追われ、公園に行かないまま一ヶ月ほどが過ぎたと思う。諸々のこ

とが済んで、明日には親戚のもとに引き取られるという夕方、誰もいな家は窓から西日が長く入り、僕は例えようもない寂寥感に駆り立てられ、公園に向かった。

彼女はそこにいた。変わらず、冴えた冬の星空のような静穏に包まれていた。

僕は彼女に両親の死について話した。両親の研究データが盗まれていたこと、両親は以前からねらわれていたこと、そのため、予定などは一切漏れぬよう細心の注意が払われていたこと、従って、両親の死が事故ではない可能性があるがあると、警察に言われたこと。彼女は身じろぎもせず、白い頬や細い指が夕日に赤く染まっていた。

やがて辺りは暗くなり、最後に、僕は彼女に贈り物をした。クリスタルでできたハート。クリスマスツリーのオーナメントの一つ。あの夜からずっと、宅配便の段ボールを震える手で開けてから肌身離さず、持ち続けていた。多面的にカットされたピンクのハートは、ふっくらとして愛らしく、透き通って美しく、そして冷たい感触を僕に与えた。

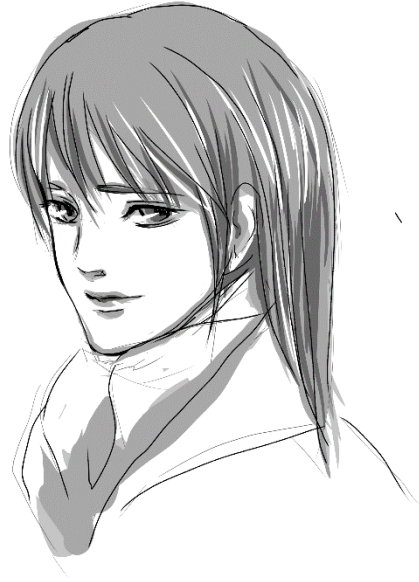
ポケットの中であたたまったハートを、彼女は黙って受け取ってくれた。嬉しくなって僕は言った。

これ、君みたいだなんて思ったんだ。

そう言うと、彼女は不意に顔を歪めて、唐突に立ち上がると、僕に会釈して公園を去っていった。僕は呆然と彼女のほっそりとした後ろ姿を見送った。

次の日、僕は遠い町へと引っ越した。

それっきり、あの公園で別れたきり、彼女とは会っていない。それでも時々思い出す。言えなかったメモリークリスマス。僕の、ひとつの子供時代の終わりとともにある、僕の初恋の少女、思い出の中の、グラスハート。



遠くなり遠いほど想う哀しみを
あの笑みだけが慰めてくれた

「信宏、起きなさい！」

覚醒の瞬間は恐ろしい。夢の中に浸っていた体が、自ら引き上げられるように、朝のルーチンに組み込まれる。

いつものように母親の愚痴を聞き流しながら、信宏はちらりとリビングのカレンダーを見た。十二月二十四日、赤い丸がついている。

「今日はあっちゃんのお家でクリスマスパーティーでしょ」

「うっせえぞ、ババア」

皿からワインナーが下げられる。

「そうかそうか、信宏は今夜勝負かけるのか」

「父さん！」

ワインナーがころんと戻ってきた。

父も母も信宏が、隣に住む幼なじみの娘に渡すクリスマスプレゼントの資金を貯めるのに、バイトの掛け持ちを快

く許してくれた。もちろん期末の成績維持は条件だったが、深夜に帰宅してもテーブルに食事と「頑張れ」のメモは涙がでるほどありがたかった。

ぺろりと朝食を平らげて、信宏は席を立った。

「ごちそうさま、行ってきます！」

いつもとは違って、通学路もどこか華やいで見える。昨夜、煌々としていたイルミネーションが垂れ下がる家から、ダツフルコートにマフラーの娘が飛び出してくる。マフラーに埋もれた顔は遠目にもはっとするほど整っている。

「信宏、おはよ！今日はクリスマスパーティーだね！」

屈託のない笑顔は大輪の花が咲いたようだ。開いたままの玄関からは、彼女の母親が手を振っていて、その後ろに父親が立っている。

二人とも長身で、この両親にしてこの娘ありといった容貌だ。やけに機嫌の良い笑顔の母親と、不機嫌そうな父親に、信宏はぺこりと頭を下げた。

「ね、信宏。プレゼント何くれるの？」

「よく言うよなあ。お前こそ何にしたんだよ」

「信宏が欲しがってたものだよ！」

信宏が欲しいものは決まっている。頬を赤らめた信宏へのぞき込んで、また幼なじみは笑う。

「すっごく楽しみ」

何て無邪気で、何てかわいいのだろう！

プレゼントを渡して、「ずっと好きだった。つきあってください」そう言うつもりだ。長い間彼女を見守ってきたのだ。幼い頃から、銃撃を浴びてもなお。

「……え？」

「もう、ぼーっとしないでよ」

信宏はじつと幼なじみの見慣れた顔を見つめた。いたずらそうなほほえみがふっくらした唇に乗っている。

もうずっと、彼女の凍りついたような顔を、隠れてみることだけが許されていた。

ぐらりと地面が傾いだ気がした。しゃがみ込む信宏の背に、彼女が手をかける。

「ねえ、どうしたの？」

信宏は強く頭を振った。今夜はクリスマススイプ。それを強く思い浮かべる。自分が渡したプレゼントを受け取る幼なじみの顔を。けれど、箱を開けた瞬間、まるでそれがバ

ンドラの箱のように、押し込んでいたものが溢れ出てくる。

「信宏!？」

彼女に体を引き上げられる。まるで今朝、夢から覚めた時のようだ。夢から覚めて、また夢から覚める。どこまでが夢なのだろう。箱の中の箱のように。まだ手放せない。平和な日々。

彼女の笑顔を守りたかったから。

信宏の顔を見て、彼女は眉尻を下げた。こんな顔もできるようになったんだ、と嬉しさと、涙がこみ上げた。

パーティーは夕方から始まって、九時にはお開きになった。

幼なじみの父親は、娘のことになるとやけに厳しい。

「信宏、これ、ありがとう」

彼女の首元には、信宏があげたネックレスが街灯の灯りに輝いていた。

ほんのりと染まった頬が、何ともかわいらしい。結果として、告白は大成功だった。

信宏の一世一代の、お互いの両親を前にしての告白を聞いて、彼女は恥ずかしさのあまり部屋に閉じこもってしまふというハプニングもあったが。

「具合、もういいの？」

「うん、たぶん、今夜のことで緊張しすぎてたんだ」

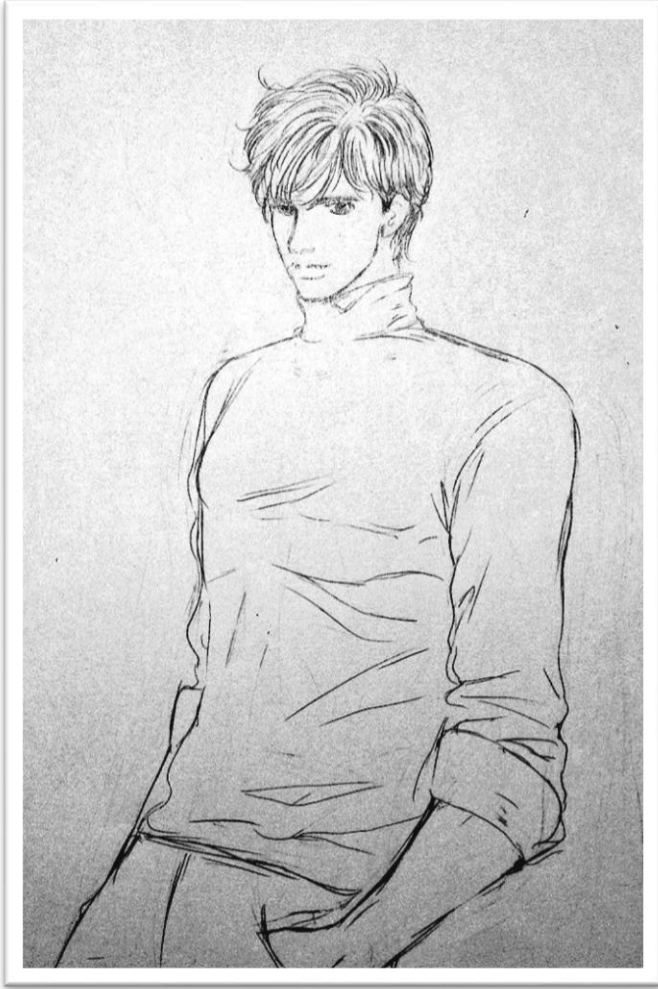
「……嬉しかった、よ」

身を寄せてきた彼女と信宏は手をつないだ。心臓が張り裂けるのではないかと思った。

今日まで続けてきた彼女との日々が、明日からも続いていくことを、信宏は強く願った。

「メリークリスマス、君が、好きだよ」

買ったけどこのまま置こうこの部屋に
ラッピングなんていらなかったのに



盛り上がり

盛り上がりれば

どうやって？

雪へと変わったことなんてない

寒さに凍えてろくに歩けない香を、獠は乱暴に車の後部

座席に投げ入れた。

獠は不機嫌に首都高へと車を出した。

冷え切っていたところに、エアコンが作り出す温かい空

気に浸され、香は猛烈な眠気に襲われ、そのまま眠り込んで

しまった。

夢を見た。主人公は何人も、入れ替わり立ち替わりする。ショートムービーを何本も見ると似ている。その全てが、「メリークリスマス」と夢の中の人物が告げて終わる。

ツリーの飾り、灯る灯り、それは遠い日の思い出だ。兄と祝ったクリスマスもあつたし、もつと幼い頃はまた、別の誰かがいたような、取り留めのないイメージからできたカラージュ。いつも誰かがいたわけでなく、一人きりで迎えた聖夜もあつた。

どんな聖夜も変わりなく、香は待っている。サンタクロースを。そばにいてくれる誰かを。

カタリと小さな音がして、香は重い臉を押し上げた。夢は一瞬で霧散した。見慣れた部屋、獠の部屋だ。廊下は明るいの、室内は暗い。力強い腕が香の体を抱き上げていた。香ひとり抱えても、獠の力は揺るがない。頼もしいが、同時に恐ろしい。本気になった獠に勝てる者はいない。端正な顔立ち、輪郭だけが浮かび上がり、表情は、逆光になってわからない。

「……獠」

恭しいと感じるほど、優しい手つきで香はベッドに下ろされた。

「獠、何か言って」

獠は何も言ってくれなくて、香は途方に暮れた。

しばらくして、獠も同じように途方に暮れているのかもしれないと思った。

途方に暮れて待ち続ける聖夜。

しばしの沈黙の後、気を取り直したのか、獠は抵抗もまなならぬ香の服をおもむろにはぎ取り始めた。

香にとって、獠は最初の男だ。そして、たぶん最後の男なのだと思っている。だから、別の誰かと比べようもない。

けれど、獠がこういった行為に手慣れていることはわかる。香の衣服を脱がすのに、ためらいのひとつもない。

片手でブラジャーのホックをはずし、反対の手で肩を押さえつけて、次はショーツを引き抜いてしまう。

膝を合わせて逃げようとするも、すぐに太股の間に胴を入れられる。

獠は香を押さえつけたまま、素早くコートを脱ぎ、ズボンのファスナーを下ろした。ファスナーの滑るジャツという音が生々しく、香は息を飲んだ。

大きく大きな熱の固まりが、足の間に押しつけられる。殆ど愛撫することもなく、受け入れる準備が整うはずもない。

香はまだ凍えた舌を必死に動かして抗議しようとするが、獠の表情がうつすらと見て取れて、わなわなと唇を震わせた。

何の表情も浮かんでいない。

声を失った香に代わって、柔らかな入り口と、それを囲む花びらが、いいようにむしられることに怯えて悲鳴を上げる。

「入んねえな……」

香はがくがくと頷いた。どうしてそれが香の中に収まるのか、いつも不思議になってしまふ、熱い質量が香の乾いた襞に押し入ろうとしている。

「ひいっ……ん……」

ぐいぐいと押しつけられて、香は悲鳴を上げた。これでは犯されるのと変わらない。体が内側にめり込まされるような苦痛の予感が、香の目に涙を浮かべさせる。

膜の張った香の目から獠は視線を逸らし、香の白い下腹部へ顔を伏せた。

香の裸身を、自らから隠すように、獠はその手を香の上半身の上に置いた。

「どうしたら、お前をつなぎ止めておけるんだろう……」
獠がぼつりと呟いた。あまりにも小さな声だったので、

香は幻聴かと自分の耳を疑った。

「時々、頭が真っ白になっちゃう」

囁きに敏感な皮膚が粟立つ。珍しい、獠がこんな弱々しい姿を見せるなんて。香は、獠の形の良い耳を見つめながら、今、獠の心を乱す脅威に、自分の存在が深く関係していることに思い至った。

すると、そこそ吹き出るように、胸の奥から獠に対する愛しさが溢れ出てきて、香は突き動かされるまま、獠の頭に手を置いて、自分の腹に押しつけた。

獠に気圧されて、震えていたのが嘘のように、するりと言葉が出た。

「どこにもいかないから」

獠が顔を上げる。切れ長の双眸が上目遣いに香を見る。背筋がぞくりとした。

大きな闇がのしかかっている。闇には光る目がついていて、それは例えようもなく美しかった。どれほど研磨すれば、これほどの美しさを放つようになるのだろう。激しく削られ、それでも消えることなく耐え、光を放つ存在が、どれだけ希有なことだろう。

「獠の……好きにしたいいの」

獠の代わりなどどこにもいない。荒々しく野蛮な、傷だらけの獣。

香は食らわれても構わないのだ。

どこにも行かせたくないなら、手元に縛り付けて置いて欲しい。去ろうとしたときは、そのまま撃ち抜いてくれて構わない。絡んだ視線から、どれほどのものが伝わったろうか。

獠は香の手を払うと、のろのろと上体を起こし、香の四肢を縫い止めて、真上から香と視線を合わせた。その様子が、蛇が鎌首をもたげるような、獣が獲物に食らいつくときのような、強い殺気を漂わせている。

怖い——でも、逃げたくない——。怖いもの、醜いもの、顔を覆った指の先から、けれど、見ないではいられないもの。香はずっと昔に、その深淵に飛び込むことに決めたのだ。

あまりにも強く射抜かれて、香は子どもが言い訳するように、続けた。

「プレゼントに貰ってくれるんでしょう？」

とろりと獠の目の色が緩む。闇の中、漆黒の瞳が艶を帯びて、僅かな光を照り返す。獣と人を行ったり来たりする。道化とヒーロー、光と闇、揺らぎ続ける存在の、恐ろしいほどの魅力。

香は震えた。恐ろしさではなく、甘い予感に。体の芯から獠に答えたいと願っている。香は腕を伸ばし、獠の太い首に巻き付けた。強い脈が伝わってくる。

どちらからともなく唇が近づいて、キスが始まった。

唇をこすりあわせていても、獠はちつとも動かない。もどかしくなって、香は舌を伸ばす。そろそろと獠の上唇を舐めると、薄く隙間ができた。そこから尖らせた舌を忍び込ませる。

獠の口内は熱く、煙草の苦い味を感じた。その瞬間、香の下腹部で小さく熱が弾けた。苦いだけではない。その向こうにある、獠を味わう為に、香は夢中になって舌を伸ばした。

香は気づかないうちに、体を起こして、ぶら下がるようにして、獠の唇に吸いついていた。獠が香の太股をつかみ、自分の膝をまたがせる。座ったまま抱き合うと、一層香は舌を深くへと、丹念に口内をまさぐり始めた。

獠はそつと香の足の付け根を探る。

先ほどまでは乾いていた花びらが、もう濡れそぼっていた。

「あっ」

つ、と輪郭を濡れた指で辿られて、香はたまらず口づけを解いた。

頬は紅潮し、首筋のあたりもうつつすらと色づいているのが、夜目にも扇情的だ。ましてや、濡れた唇など、目の毒でしかない。

「……濡れた？」

「わ、わかんない」

「まだ何もしてない……キスだけだ、香」

「わかんないよう…」

「もつとすごいことしたい。俺のことだけ考えさせたい」

言いながら、獠の指は花びらの奥をかき回し始めた。浅いところを太い指が丁寧に滴をからめ取るように動く。

「もう…なつて、る…!」

香の体がびくびくと跳ねる。香は意識していないが、小刻みに軽い絶頂を感じているのだ。

香は獠に丹精され、花開いた大輪の薔薇だ。自らにその芳香はわかるまいが、獠がありとあらゆる快樂の芽を育て上げた体は、彼の指先ひとつでいいように乱れてしまう。

肋の浮かぶ皮膚をひと撫で、丸い骨を隠した肩を撫でられるだけでも、それが獠の指であれば、香は絶頂を迎えてしまう。

「お前を感じさせて、どろどろにしたい。くわえ込んで、よがり狂って、泣くお前がかわいい。香のここを俺のでぐちゃぐちゃにして」

熱情を模した指の動きは、鋭く尖った快感を置いていく。積み重なっていくのがもどかしく、香は咽せるように喘いだ。

まだ足りない、足りない。獠に求められれば、果てしなく快樂を食ることが、当たり前なのだ。香は思い込んでいた。

獠の黒瞳が、また、とろとろと闇を深くする。

獠は執拗に指で香の体を高めた。指では埋めたりない。ひくひくと内部がうねり、指が踊る拍子に、とくりとくりと訴え溢れた。

あまのじゃくな意地っ張り、体だけは獠によってこれ以上なく、快樂に奔放に作り替えられている。香自身も気づかぬまま。男なしでは、それも極上の男が与えなければ、満たされない快樂の器だ。

「もうずっと、獠のことしか、考えら…」

眉根を寄せた香の顔だけは、まだあどけない純粹さを残している。昼は猛獣使い、夜は野獣に貪られる。

「つながったら、俺もお前のことしか考えられなくなる」
獠が育て、獠の為だけにある淫婦。彼に独占されるためのイブ。蛇に騙されたイブ。

愚かであるほど愛しくて、体も心も、触れただけで狂い出すほど。

救世主の降誕を祝う夜。

救い主が現れるのが喜ばしいのは、世界が苦難に満ちているからだ。

苦難は悲嘆を呼び、その苦しみが深ければ深いほど、救いに手を伸ばし、やっと与えられた光にすがりつく。

耐え難いのは、苦痛が与えられるものではないことだ。

苦痛は、苦難故に犯した己の罪の深さゆえ。罪深ければ苦痛は増し、増す程に、光が恋しい。

光は、救済を望む数多の手によって、引き裂かれはしないだろうか。

香は快楽を逃がすということを知らない。絶頂を得て敏感になった体を弛緩させてしまえば楽になるのに、また身構えてしまう。次に与えられる快楽に立ち向かおうと彼女がするほど、深い悦楽に引きずり込まれていくのだ。

香が瞬きをすると、毗から涙が溢れた。空から零れ落ちる星のごとき煌めき。

獠の膝の上で、香は息を弾ませる。時折背中をしならせ、その度に新たに星が生まれ落ちる。

獠の腕の中で、百合の花が震えて、涙をこぼしている。

「どうしたい？香は、俺をどうしたい？」

香はきつと今、苦痛に近いほどの快楽のるつぼにいる。

シンプルな彼女の体は心に引きずられる。心を丸ごと捧げてしまった相手だから、体もそのまま感じてしまう。もちろん、羞恥は常に香の頭の隅にある。女らしくないと言われ続けたコンプレックスも。しかし、それらも、獠の指先に払拭されてしまう。

香はあはあと荒い息を繰り返すだけで、答えられない。獠が狭く濡れた内部をひつかくと、香の唇がわなないで、はあっと一際強く息を吐いた。

「も、もう…やめ…」

「聞こえない」

親指の爪で固くこごった実をこすりあげる。電流が走ったように白い背をびくつかせ、香は悲鳴を上げた。びくびくとのたうつ体を抱きしめ直す。香の性感は、一度目覚めれば、かすかな刺激にも最大値を返してしまう。ぴたりと合わせられた胸が、獠の服にこすれるのも痛いほど、抱擁は、体すべてを絞られる拷問に似た恍惚をもたらした。

香の頭の中が塗りつぶされて、まともにものが考えられなくなっているのだから、香は獠を見ているようで、焦点は合っていない。

欲しい、もっと奥まで、激しく、深く。

太くて、熱くて、固いものを、突き入れて欲しい。

「……ください」

香は愛情を乞うことが得手ではない。だから言わせたくなるのかもしれない。香の中に隠れた貪欲さを暴いて、それが自分と似ているか確かめたくなる。

醜いと思う。一番汚いところでつなごうていたい。相手に対する尊敬も配慮も感じられない行為だ。快楽と引き替えに白状させるなんて。

「獠が、欲しいの……」

香の頬には涙が幾筋も流れていた。ずっと絶頂に押しやられている意識では、明日になれば忘れてしまっているかもしれない。

「俺も、お前が欲しいよ」

収斂する場所から指を引き抜く。ぬちゃっと粘ついた音かして、泡立ったものが獠の手のひらを伝う。

香の媚態を楽しんで、獠は十分に勢いを得ていた。はちきれそうに膨れ上がった切っ先を押し当てると、香はおのいて、ぐっと顎を引いた。

いつもならじりじりと肉を割り開く、それだけの余裕も与えたくなくて、獠は一気に香を貫いた。

「あ、ああああっ！」

香が甲高く叫び、ぶじゅっと押しよけられた蜜が溢れ出す。香の下生えが濡れ、獠のズボンにまで伝う。

「あ、あ、ああ、あ……」

あまりの衝撃に、香は虚ろな目で、断続的に叫んだ。あまりにも大きくて、引き裂かれそうだ。それでも香の内部は喜んでいる。やっとなえられた隙間のない結合。一度収めきると、獠は内部の感触に酔った。うねうねと獠の膨らんだ先端に絡みつき、絞り上げようとしている。獠は、突き当たった奥襲を存分に味わって、それ以上先がないことを確かめてから、今度はずるっと勢いよく引き抜いた。

信じられないほどの充溢感が、引き抜かれる勢いとともに恐ろしいほどの喪失感に変わる。香の内部をそぎ落とす、削り取って空っぽにしてしまう。

「ああ——っ！」

次は、ぎりぎりまで引き出した長大な凶器で、入り口のあたりをぐりぐりと抉る。襲のひとつひとつをこそぐように強く執拗に抉る。

「ひっ、んう……っ」

香は唯一の快樂の逃がしどころである唇から、抑えがたく嬌声を上げた。香の臉裏には、ちかちかと火花が散っている。

「そこは……だめ……きつい……から……っ」

獠は構わず、思うさま入り口の締め付けを楽しむと、また深く貫いた。ずにゆりと肉が鈍く響く。衝撃に香の腹が波立つ。

「ひあっ」

また飲み込まれる絶頂。香が大きくのけぞった。

そのまま香の体をシートに沈める。しっとり汗を含んだ内腿を撫で上げると、またひときわ強く締め付けられた。

すんなりとした臍を掴み、肩に担ぐ。いくらか結合は浅くとも、存分に動ける体勢だ。それに気づいてか、香が獠を見上げる。獠は、涙と、汗と、額に張り付いた前髪をそつとよけてやる。香の濡れた唇。

上体を屈めば、違う場所が扱られる。香を襲う尿意に似た、遙かに強烈な痺れ。そしてまた極める。

「んっ……」

舌を絡ませる。舌の先端から、裏側も、白い歯のひとつひとつもお互いに舐め尽くして、ねっとり溢れ出た唾液が香の顎を伝う。

獠はその間も、ゆるゆると腰を動かし続けた。

ひと波ごとに、苦悶するようだった香の顔が、糸のものを解くように安らかになっていく。

「ああん……あん……あう……ん……」

嬌声も、悲鳴じみたものから、子猫がのどを鳴らすような甘ったるいものになる。

いつもの香なら耳を塞ぐであろう、糸を引くような水音がつながつた部分からひっきりなしにしている。じゅぶ、ぐぶん、と音に合わせて、香の尻も揺れる。獠に合わせて、より深く飲み込み、よりぎりぎりまで引き出し、内部をこすり上げる剛直に狂喜する。

「はっ……おっきいの……あん……ふかい……」

混ざり合った淫液は溢れ出て、熱い肌の上で、伝っては乾き、乾いた上にまた引き延ばされ、どこまでが性器かわからないくらいになっている。

ぐちゅ、ぬちゅ、と音を立てる部分に香は手を伸ばし、伸びきった粘膜をたどった。

法悦が香の自我を破壊する。

香は淫蕩にほほえんだ。

「もっと……して……」

赤い舌先をちらりと覗かせた香は、獠に見せつけるようにゆっくりと、指がすくい取った粘液を舐めた。どちらともつかぬ白く濁ったものが、香の赤い口内に消える。

「おいしい、ね……」

獠は目を細めた。

濡れた下草を撫でつけ、肉を打ち付けるスピードを速める。

「あっあっあっ、あ、あっ」

駆け上がるなら一息がいい。

香の喘ぎが甲高く、長く響いて、最後の絶頂を迎えたのを見取ってから、獠は香の最奥にどくどくと精を放った。

ようこそ、救い主。汚れた罪人のもとへ。

こみあがる
ことばかりでも
こらしくて
これがいいんだ
これでいいんだ



「誰だよ、カオリに似てるなんて言ったの」

ミックはレンタルビデオ屋の店員に管を巻く。すつかり新宿にも慣れて、大人の遊びもいろいろと教えてもらった。

日本のアダルトビデオは規制が緩い。アメリカでは見られないような表現が、目下、ミックの研究対象だ。

店員がむつすりした顔でバーコードを切っているのは、店員おすすめのアダルトビデオだ。ソフトな言葉攻めと、いわゆる清纯な娘が快楽に堕ちる様を丁寧に描いたと評判の一本だ。女性が借りていくこともしばしば。

ミックはカウンターに上体を凭れかけたまま、背後の棚を振り返る。地震が来ればひとたまりもないだろう、棚・棚・棚。

「ロマンチック・アダルト・ビデオ、略してRNVだって。Loveとかけてんのかよ、ったく……」

「冴羽さんの紹介だからまけてやってるんですから。図に乗らないで欲しいっす」

業務妨害と追い出されて、ミックは街をぶらつく羽目になる。小脇に抱えたセカンドバッグには、アダルトビデオ、もといロマンチック・アダルト・メイクラブ・ストリー、もとい、レンタルしてきたDVDが入っている。

気温とは別に、東京の冬は寒い。風が乾いていて、またビルの合間を吹きすさぶから、体感温度が低い。

ミックはコートの前を掻き合わせる。何となく、自分が惨めな気持ちになってきた。

居てもたっても居られなくて、目に留まったコーヒーショップに飛び込む。

アメリカンという不思議なコーヒーを手にして、大きなガラス窓の前の席に落ち着いた。

「TOKIO CITY か……」

ひよっとしたら近くに座る女性がミックに声をかけたいかもしれないので、長い足をことさらに長く見えるように組み直しておく。

アメリカは国土が広がった。貧富の差も非常に大きく、それに比べれば、東京はまだましな方だ。それも昨今では

その限りではないようだけれども。裏稼業のしがない性なのか、光の中にあっても、ぼちりとシミのようにある影が気になってならない。自分が陰に生きるだけでなく、影を生み出すこともあったから。

足を組み換えて、ついでに前髪もかき上げておく

「女優はまあいいとしても、男優がな……」

当たり前なのだが、ロマンチック（略）で、カオリ

（仮）にのしかかっていたのは、東洋系の男性だ。この手の男優にしては、引き締まったいい体をしていた。格闘技か何かしているのかもしれない。

ミックとしては、金髪碧眼の……いや、むしろミック自身が男優として……

その時、セカンドバックが振動した。

「ポケベルが鳴らなくて……俺が空回りして……」

取り出したのはポケベルでなくスマホだ。それを改めてまじまじと見て、「磯野」と呟いて、ミックはコールに応えた。

「カオリっ？なになに、パーティーー！？行くよ！行くに決まってるじゃないか、むしろカオリはイっちゃってもいい

んだよお！うるせーな、横から入ってくんなりヨウ！今から5秒で行くからクソして待ってろ！」

スマホをバッグに戻すと、こちらを見ていた女性客と目が合った。

「失礼、美しいお嬢さん」

にこりと微笑むと、相手の顔がぼうつと赤らみ、目がとろける。よし、まだいける。心でガッツポーズする。

ミックは、今の生活が嫌いではない。リョウには決して言わないが、言わないでも伝わっているだろう。この街の王であるリョウのかつての片腕、今は親友。何をしても、どこにいても、互いの無事を祈るくらいには、友情はまだ燃えている。

生き残った者は死者のための祈りを捧げる。死者がたどり着く国に苦しみはない。苦しみに満ちた生を通過する。そして今日はクリスマス。救い主の降臨、生者のための。だからきつと家族が恋しいと、この日だけは思うのだ。

店を出たところでまた電話が鳴った。

「ああ……うん……そうだな、寒いと痛むけど飲んだら治るって……心配性だな。…ああ……わかったよ、またあとで。リョウ、Mery christmas」

目を伏せた、アスファルトに白いもの。

雪が降り出したのだ。

「道理で寒いと思った」

寒さに覆われた空から逃げ場を求めて、足早に歩きだす。セーターの手首を捲り、腕時計を見れば、約束まではまだ時間がある。この時計は誰から受け継いだものだったか。それが金時計であれ、おもちゃの時計であれ、時を刻むことに代わりはない。何かの価値や存在に拘泥することを、天にまします唯一神はいかに思われるか。

御心に悖るとも、メリークリスマス。あなたから、私から、サンタが街にやってくる聖夜。

「あー、アダルトじゃないロマンチックも借りてくりゃ良かった」

こうやって、くだらないことを、くだらなく生きていく。そういうものを、平和と言うのではないか、とミックは思っている。

清らかに包み込んでくれるこの夜は
電話ボックスでハードなセックス

こうして傍にいたってね
やっぱり素直に言えないじゃない
のんでお酒に流されて
めずらしい？だって今ならね
ぐだぐだ酔った勢いで
みつめて言うの、アイラブユー

みんな香の肩もって 俺には
ぐちんなよってうるさいの
めめしいなんて言われてさ
のまなきややってらんねえよ
やっぱりそれでもお前がさ
こんなはどうしていとおいしい



あとがき

今回の文集は、去年に引き続き「クリスマスなんかやんないの？」という無茶ぶりから始まりました。ちょうどドラマが終わった直後で、なんだかもやっていたところに、剛速球が来まして打ち返したらこんなことになってしまった次第です。

自分だけが無茶ぶりされるのもあれなので、優しい方々にも声をかけまして、イラストや短歌（！）と一緒にまとめて、文集という形になりました。

クリスマスプレゼント！

えびすなさんが描いた海原のお洋服の胸ポケットのボタンをじっと見ていると乳首に見えてきて、ひよっとした胸ポケットじゃなくてそこだけ切り取って乳を露出していますね、それを「親父！出てるぞ！」「やっとお前も気づ

いたか」みたいなやり取りをするって言い張るんですよえびすなさんが。

あとションはメインでコマatchingなんだけど、下の句が決まらないからって「あの微笑で自慰はぬるぬるにするって言い張るんですよメインさんが。この場合のぬるぬるはタブレット等の動作がぬるぬるに似たぬるぬるであって、完了ではないです。

みなみんは実はラッセン並みの絵が描けるんですよ…。いつもありがとうございます。みんなの心を明るくしてくれます。

ヨフカシさんはファーファー言い過ぎなので、シャーシャーから乗り換えたのかなって思っています。

そして、なおさん。超弩級の表紙をありがとうございます。ひつぜつにつくしがたい…。

こういう文集にありがちな座談会をできなかったのだけが残念です。

二〇一五年クリスマス

千日紅 拝

本文	千日紅
短歌	ション・コマネインリー
挿画	みなみ
	えびすな
	なお
	ヨフカシ
表紙・デザイン	なお
作成者	YOU

※本文集の小説・短歌・イラストについて、一部あるいは全部の複写・複製・転載を禁じます。